あとがき

近年、教育のパラダイムの転換が迫られています。特に高等教育の質をいかに保証するかが問われ、政府主導で教育再生が推進されています。また少子化にともない、大学の生き残りをかけた学部学科の改組や新設などの改革がさまざまな大学で進められています。

本学も例外ではなく「発刊の辞」で中村幸弘学長が述べていますように、平成二十四年度に、日本文化学科と人間教育学科の二学科に改組しました。日本文化学科は、それまでの国文学科・商学科・日本史学科を日本文学・言語文化・日本史の各フィールドとして統合し、クロスオーバーラーニングを目指して再出発をしました。

そうした状況の下、学科ごとに発行していた学術雑誌を一誌に統合する案が提案され、平成二十六年四月から日本文化学科長の鍛代敏雄教授によって開催された学科会議において、刊行の可否はもとより、どのような雑誌にするべきなのかなど議論が重ねられました。その結果、雑誌の刊行が了承され、直ちに執筆者を募ったところ、十人のエントリーがありました。「学術雑誌検討会議」と名付けられた編集委員会を中心に、雑誌の体裁など刊行に向けた準備が進められましたが、年度末に鍛代学科長が転出されるにおよび、職責を引き継いだ私に雑誌の刊行が託されることになりました。

平成二十七年五月の学科会議において、刊行の目的「國學院大學栃木短期大学日本文化学科の教員の教育・研究活動の成果など幅広い日本文化に関わる論考・作品を収録して刊行し、本学科の活動を全国に向けて発信する」

を確認した上で、雑誌名を決めることとなりました。六つほどの誌名が提案がされました。いずれも本学の伝統と栃木という地域性を考慮したもので、甲乙付けがたいものでした。そこでやむを得ず評決することとなり、二回の投票の結果、現在の誌名が選ばれました。

誌名が決まったことで編集作業は本格化し、夏休み明けに原稿の投稿を締め切り、六本の原稿を掲載することになりました。版型、書体や文字のサイズ、さらに表紙のデザインなど具体的な体裁を決めるために編集委員の間でさまざま検討して、ようやく発行の運びとなりました。

お読みになっていただけましたでしょうか。なかなかの力作揃いではありませんか。本誌が日本文化研究の新たな礎になることを切に願い、ここに創刊号発行までの経緯を書きとめておきます。

平成二十八年三月十日

日本文化学科長　酒寄雅志